昭和55年10月23日第三種郵便物許可／エネルギーいんふぉめいしょん４月号／平成９年４月10日（毎月１回・10日発行）

エネルギーいんふぉめいしょん

1997
4月号

VoL-21・No.4.通巻第236号

●禁無断転載●

もくじ

■焦点 …… 1
●「付和雷同集団」からの脱皮

■エネルギーを考える会　定例勉強会から …… 2
●近未来を展望する
会員座談会
政・官・民ともに思考の大転換を

■コーヒーブレイク …… 18

■出版物ダイジェスト …… 19
●若者に贈る　原子力の話
村田　浩　著
原子力への熱き思いをこめて語る
どうすればその事故を防ぎ安全性を守れるか
●ちょっと拝見　広報誌（紙）

■エネルギー記念日 …… 24
●発明の日　科学技術週間

焦　点

「付和雷同集団」からの脱皮

ここ一〇年余り日本は、やることなすこと、全く壷に嵌まらず、行先き不透明の状況が続いている。政治も経済も福祉も教育も、行革・財革も・・・。国民の苛立ちがつのる中で、「改革」というスローガンのみが、一際むなしく響きわたっている。

さてどの問題も、掘り下げてみると、同じハード・コアに辿り着く。それは、日本という国の（その中の企業・団体の）アイデンティティの無さ、日本人（個人）の同じく個性の喪失である。教育問題を例に言えば、イジメや不登校、受験地獄や画一教育の現状を憂い、いくら教師や文部省などを批判してみても、スケープ・ゴウト探し以上にはならないであろう。またエネルギー・環境問題を論じると、きまって「テレビの害」が俎上にのぼる。たしかに報道の内容や姿勢には目にあまるものが少なくないが、受け手の側の集団特性こそ、その影響を拡大している、日本ならばこその事態があると思う。

戦後日本では、企業も個人も、ひたすらトナリとの「横並び」を最優先に努力を重ね、今日のうたかたの繁栄を築いてきた。筆者も、過去におけるそのメリットまで否定するものではないが、その結果個人も企業も、個性の無いを良しとする風潮が蔓延し、寄っ掛かり合い、馴れ合いの、人の価値を肩書やテレビ出演で計るという、奇妙な一大「村社会」が現出した。最近、遅まきながら社会主義の基準が近代化したかのように、政府や会社や団体のトップの、これまた同じパターンの「陳謝」、「引責」が連日紙面を賑わせているが、これもスキャンダルの暴露以上の動きにはなりそうもない。

故司馬遼太郎氏の嘆きの通り、明治中期まで千数百年もの間、国際的にも大過なくやってきた日本人には、それなりの品性なり徳性があったはず。一日もはやく、「付和雷同の民」に別れを告げ、一人々々が人格を確立し、生活のあり方から（私利によらない）議員の選び方にいたるまで、主体的に判断し行動する、近代国家の市民へと脱皮してほしい。でなければ、いつか来た道を、また歩むことにもなりかねない。

（森　一久）